
ndence person of endless fate ~ **果て無き宿命の超越者** ~

ヘルメス・トリスメギストス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

transcendence person of endless
s s f a t e ￣果て無き宿命の超越者￣

【Nコード】

N3368N

【作者名】

ヘルメス・トリスメギストス

【あらすじ】

A・P・5623 太陽系第3惑星『地球』を発祥の地とする地球人達が、宇宙に出て数千年。第13地球型植民星レムリアの衛生軌道上に停止する機動要塞の中に、数万の時を生きた一人の錬金術師が居た。彼は、突如発生した次元転移術式によって、未だ見ぬ異世界へと飛ばされることになる。

殆どファンタジーです。SFもありますけど。あと、序章の爺は第一話で若返ります。だから主人公は青年。だけど当初は少年。

Episode 00 (前書き)

なをとなく衝動的に書いたものを投稿。

次の更新は何時になるやら……予定は未定。

Episode 00

- A . P . 5 6 2 3 第13地球型植民星レムリア衛星軌道上

特殊任務のためレムリアに来た、宇宙統合政府本部『地球』所属機動要塞Another earth One内部の特殊研究室。この要塞の最高顧問のために用意されたその場所で、研究室の主たる老人が一面の姿見を前にして立っていた。

この研究室の照明は点いてはいない。にもかかわらず、煌煌と輝く光が老人の姿を照らし出している。

光を放っているのは、鏡。如何なる怪異魔術の類か、老人の目前にて鎮座する姿見が、その鏡面から眩いまでの強烈な光を発していた。その光ゆえに、まともに見ることも叶わない姿見を、老人は眩しさを感じていないかのごとく正面から眺め、また、その不思議な現象に対して驚いた様子すらも見せない。

暫く姿見を眺めた後、老人は「むう」と唸った。

「幾多の星と数多の世界を巡り巡って数千年。次元の壁すらも超えたが、このような奇妙奇天烈極まりない世界なぞ、終ぞ目にする事無く来た」

姿見から目を逸らさず、老人は独白する。この老人には、光の先に姿見とは異なるなにがしかが見えているのだろうか。

「儂を招くでも無いようじゃが、何処かの小童を呼んでおるのか……。然れど、次なる段階に至らんとする、今この時の儂の面前に現れようとは。是も儂の宿命の1つか」

呷く老人の口元が、徐々に歪んでいく。
嗤う。

世の全てを蔑むように、万象嗤笑し哄笑する老人。

「呵ッ呵呵呵呵呵呵呵！ 丁度良い。新たに見付けし其処此処の世界惑星みな押し並べて似寄りよ。偶の慰みには絶好の頃合なれば、この機会逃してなるものかよ」

老人は嗤いを止め、眼前の姿見に向かってその手を伸ばす。

老人の手が姿见到触れたまさに其の時、姿见から発せられる妖光がその勢いを増し、老人の瘦躯を飲み込んだ。

光は尚も増大し続け、果ては研究室の外にまで溢れ出し、Another earth Oneの一区画を完全に飲み込む。

「呵ッ呵呵呵呵呵………次元転移！」

機動要塞 Another earth One指令区画

「総司令！ 鑑内部より次元転移術式の反応あり！」

「何だと！ 発生元は何処だ！」

「特定出します！ ……出ました。……！ これは……！」

オペレーターが、モニターに表れたデータを見て驚愕に目を見開く。

「どうした！ 報告しろ！」

「は、はい！ 発生源は研究区画の秘匿Level 5、最高顧問のラボです！」

「な……！」

報告の内容に、絶句するA・E・O総司令。

研究区画の秘匿Level5。そこは、この要塞内において最も問題の発生してはいけない、最重要ポイントであり、あらゆる手段でもって想定しうる全ての障害から守られている、最も安全な箇所のはずだ。

それが、何故次元転移術式の発生源となっているのか。

長年、かの最高顧問の下で働いてきた彼であるが、あまりの事態に思考が停止していた。

「！　そうだ！　最高顧問は、最高顧問の御身はどうした！」

思考停止から復活した総司令は、混乱覚めやらぬ頭で、この機動要塞に乗っている者の中でも最重要たる人物のことを考える。もし万が一彼の身に何かあれば、自分の首が文字通り飛ぶだけでは済まないだろう。

（くッ、無事で居てくれ！　頼む！）

だが、その願い虚しく、オペレーターからの報告は残酷なものだった。

「総司令……最高顧問の生体反応、ありません……」

その報告に、司令部内が今まで以上に騒がしくなる。

総司令は一度瞑目し、目を開くと共に一喝する。

「静まれえい！　あの方がそう簡単に御落命なさるものか！　……オペレーター、要塞内には最高顧問の生体反応は無いのだな？」

「はい。それどころか、御遺体も見つかりません。おそらく、先ほどの次元転移術式によって転移したものと思われます」

信頼する総司令の一喝で落ち着きを取り戻した司令部要員たちは、先程の次元転移術式に関する情報を集め、その原因を探っていく。

「そうか……。先程の次元転移術式は何処の世界、或いは星系のものか解かるか？」

「照会します。――これは……。データベースに存在するどの世界、どの星系のものとも一致しません！」

「ご自身で転移なされた可能性は潰えたか……」

もしそうであれば、データベースの中の何れかに該当しているはずだ。それが無いということは、この世界には存在しない。或いは、統合政府が未だ遭遇したことの無い術式ということになる。

厄介なのは、この術式が統合政府軍の技術の粋を集めた防御をいとも簡単に破ったということ。

（或いは、ご自身自らお招きになられたか……。何れにせよ、ご自身の意志で世界をわたられたことは確かだ。ならば――）

「至急『地球』へ報告。評議会の指示を待ち、我等は全力で最高顧問の御身を搜索する！」

『Sir, Yes Sir!』

Episode 01 (前書き)

一話投稿。次はいつになることやら。

Episode 01

- 大陸ファルセナル／ヴァレンディナ王国アルガ村

光が消えると、其処には無残なまでに破壊され尽くした、嘗ては村だったであろうモノがあった。

無傷の建物は無く、全て倒壊し焼け焦げた痕がある。生物も全て死に絶え、舗装されていない道々に野鳥に食われた骸を晒している。

「随分と派手に壊したものよ。ふむ……見た所、極最近滅ぼされた様子。骸も奇妙なモノばかりか……」

道々に転がる骸はどれも、人の仕業とは思えぬ傷痕を残している。腹部を大きく抉られ、背骨まで露出したモノ。胸から上が吹き飛び、流れる深紅で大地を染めたモノ。身体に風穴を開け、皮一枚で上下を繋げるモノ。野鳥野獣に食われて尚、その凄惨たる死に様を見る者に思い起こさせる。

老人は骸の側に膝を付き、虚空に手を翳し其処から取り出した機械を骸に向ける。

機械より放たれた赤光が骸を赤く映し出し、その身を走査する。

「ウイルス感染は無し。魔術或いは呪術的痕跡も認められず……。純粹に生まれ持つ身体機能のみでの殺害となると、矢張り人では有り得んな」

元居た世界の兵器を使えば、人の身でもこの惨劇を作り出す事は可能ではある。だが、未確認のこの世界にその様な物が在る筈も無い。

村を見た所、文明に関しても未開と言うに相応しい程劣等だ。老人が生まれた西暦の中世前後程度の文明レベルだろう。とは言え、老人の知る異世界の殆どは此れ位の文明レベルだ。其れに関して特に感慨は持た無い。

（さて……此れから如何様に行動したものか……。この件を追うも一興だが、先ずはこの世界の事を知らねばならぬ。何処ぞに街でも……む？）

老人が骸から離れた瞬間、此方に対する殺意と敵意に彩られた気配を背後に感じ、咄嗟に振り向いた。

突如、ドンツ！ と破壊音が響き、目の前にあつた廃墟が爆散する。

土煙が晴れ、寸前まで廃墟があつた場所には、何とも形容しがたき異形が佇んでいた。此の異形が先程の気配の正体か。

老人は素早く背後に飛びのき距離を取りながら、眼前の異形を観察する。

（体表には外殻、形状から見て獣型か。クラスA以上の魔力も有りとは、愉しめそうな獲物よ）

老人にとって命のやり取り等、所詮遊戯に他ならない。大体が普通の殺し方では死なないのだ、自らの死には鈍感にもなるう。

然しながら、痛覚まで無くなった訳では無いため、普通の人間が致死となる傷を負えば相応の痛みは感じる。当然、不死とは言え苦痛が快樂となる事も無く、常人における致命傷を避け無ければ為らない事には変わり無いが。

老人は、先程骸を調べるために機械を取り出したように、虚空より『柄』を取り出す。

――そう、『柄』だ。

剣身が付いていれば、二mにも迫る全長を持つであろう其れに然し剣身は無く、巨大な柄のみの異様な姿を晒していた。

「……久しい実戦だ。上手く手加減できるかは分からぬぞ、異形の者よ?」

それに対する返答は、白刃。異形の身体の彼方此方にある剣山が、砲弾のように撃ち放たれる。

無数に飛来する剣弾を前に、老人は笑みを浮かべながら微動だにしない。

着弾。鈍い音と共に、刃が地面に突き刺さっていく。だが、其の一本たりとも老人の身を掠る事すらない。全て老人が紙一重で避けているのだ。

微か身体を動かすだけで、僅か存在する剣弾の隙間に身を入れる。只其れだけで、無数の死は老人に傷一つ付ける事叶わず、大地に其の身突き立てる。

「どれ、此方からも攻めさせて貰うとするか。 - 機構展開、反応炉接続、エネルギー供給、相互変換、力場生成、剣身形成、形状固定……熱量変換形成型甲種機巧神剣零式起動」
クラウ・ソラス

右手に持つ『柄』が展開し、内部機構の一部が剥き出しになる。

機構上部 - 刀と言う鍰に当たる部分から、光が溢れる。

半秒後、四方に拡散していた光は収束し剣身を形作っていく。

対消滅によって発生した光エネルギーを熱エネルギーへと変換し、空間歪曲場によって刃状に形状を固定したものを剣身とする熱量変換形成型機巧神剣。

クラウ・ソラスは其のオリジナルにして、『地球』の有用なあらゆる技術を投入したテストタイプである。

「では……行くぞ、異形の者よ」

クラウ・ソラス起動のために動きの止まった老人に向かって飛来する剣弾。速度、数共に今から避けたのでは到底間に合わない。

然し、老人は一切の焦りを見せず、緩慢とも言える動きでクラウ・ソラスを振るう。迫る剣弾と比して遥かに遅い斬撃だが、剣弾は一つ残らずクラウ・ソラスに斬り落とされて行く。

弾が切れたか、剛爪を振るい老人に襲い来る異形。老人は、其の爪撃に合わせるように斬撃を放つ。

「呵ッ呵呵！ 遅いわ！」

異形の堅牢そうな外殻も、クラウ・ソラスのエネルギー刃の前には無に等しい。斬撃は異形の腕を斬り飛ばし、反す二の太刀で異形の身体を深く斬り裂いた。

異形は体勢を崩しながらも、反射的に残った腕を老人へと薙ぎ払う。

だが、重症を負い不安定な体勢で放たれた攻撃など、老人に対する牽制にも成りはしない。

薙いだ腕はあっさりと断たれ、半瞬後に異形の首をクラウ・ソラスの光刃が刎ねる。

「ふん。もう終わりとは、実に呆気無いものよ……ガッ!?」

首を失い地に倒れ行く異形。それを、数秒と立たずに決着の付いた、久方振りの殺し合いに失望しながら無表情で眺めていた老人が、突如鮮血を散らした。

滅多に感じる事の無い苦痛に顔を歪めながら、老人は痛みを感じる腹部へと目を落とす。

「グッ……此れは……」

其処に在ったのは、腕。堅固な外殻に覆われ、鋭利な爪を持つ腕。そう、先程まで戦っていた異形の腕に、老人は背後から貫かれていた。

見れば、斬り落とした筈の異形の腕の切断面からは、細い紐のような肉が伸びていた。恐らく、老人を貫いている腕に繋がっているのだろう。

「がはッ！ このッ……！」

改めて異形の腕を斬り落とそうとクラウド・ソラスを振り翳すが、異形のもう一つの腕によって、クラウド・ソラスが老人の手から弾き飛ばされる。

異形の本体が其の身を起こす。首など最初から無かったかのような動きだ。胴体の傷も既にふさがっている。

初めから此れを狙っていたのだろう。腕を斬り落とされたのも、胴体を斬り裂かれたのも、首を刎ねられたのも、全てはこの一撃の為の布石だったと言う訳だ。

「グ……だが、この程度では僕は殺れぬ。不死たる僕を、如何殺す？ 異形の者よ」

そう、魔術だろうが兵器だろうが、そんな矮小なものではこの老人を殺す事など出来ない。老人とてクラウド・ソラスだけが攻撃手段ではないのだ。この状態からでも、この異形を殺す事は出来る。

老人は、苦痛に歪んだ顔に余裕の笑みを浮かべながら、魔力を解き放っていく。

元々、この老人に魔術の才能は無い。才能は無いが、その代わりに数十世紀を掛けて増やした魔力がある。

魔術師ですらない見習と比べてすら全く洗練されていない、無駄だらけの魔術師が使えないが、老人の膨大な魔力は、それだけで無理矢理に魔術を発動する事を可能とした。

当然魔術としては無茶苦茶で、其の術式も到底見れたものではない。が、其の威力だけは超一流の魔術師の魔術にすら匹敵する。此れを喰らえば、この異形など跡形も残らないだろう。

「往ねいッ！」

魔術が発動し、異形を粉微塵に　しない。空間が軋む程の魔力が、何時の間にか欠片も感じられなくなっている。

有り得ない。例え魔術の発動に失敗したとしても、魔力その物が消えることはない。況してや、老人の術式にミスなど無かった。

「これは……ッ！？　そうか、こ奴　」

老人の顔に初めて焦燥が浮かぶ。

「いかん！　此のままでは……！」

虚空より刀身に幾何学的な線の走ったナイフを取り出し、異形の腕に突き立てる。

だが、切っ先が異形の外殻に触れようとした瞬間、異形より発した膨大な魔力がそのナイフを弾き飛ばした。

その魔力、紛れも無く老人の物。嘗て魔術の才を補うために、数十世紀もの時を掛け得た其れが、己より遥か劣るはずの異形によって行使されている。

其の意味することは只一つ。

「ガッ……ハッ……矢張り、魔力を……」

迂闊。余りにも迂闊。本来ならば、クラウド・ソラスにて殺しきれなかった時点で、持ち得る兵器の全てを持って排除――否、本来の姿に戻つてでも『クラウド・ソラス不可避なる不敗の輝剣』の最大稼動にて滅殺するべきだった。

以前最前に立つて戦つたのは数世紀前。以来怪翁を演じ、統合政府の運営に専念していたためか、感覚が鈍っていたようだ。最も、だからと言って何の言い訳にもならないが。

（クツ……良し、痛覚は遮断できたか。しかし、この状況……如何にしたものか。本来の姿に戻ろうにも、この有様では叶わぬか……）

大体が、科学で変えた外見を無理矢理に戻そうと言うのだ。用意していた手段は幾つか在るが、何れもこの状況で使えるような物ではない。

（奴も、待つてはくれぬか）

異形は、開放した魔力を収めずに一点に凝縮させる。魔術を使うつもりか。

「――やらせぬ！」

八割方完成していた異形の魔術に、老人は再び膨大な魔力を開放しぶつける。込められた魔力量を超える魔力の奔流に巻き込まれた其の魔術は、構築された術式を乱し霧散する。

異形に奪われた魔力は確かにかなりの物だ。だが、数十世紀掛けて増やし続けた魔力は、そう簡単には奪いきれない。所詮、異形が得た魔力など、老人からすれば極一部に過ぎない。故に、其れを上回る魔力をぶつけてやれば、至極簡単に魔術を打ち破ることが出来

る。

一瞬で打ち消された術式を見て、異形は其の動きを止める。今の魔術には、老人から奪い取った魔力の殆どが込められていた。つまり、只でさえ魔力では遠く及ばないと言うのに、其の敵から奪い取った膨大な魔力を、全くの無駄に消費してしまったと言う事だ。折角の切り札を失い、まずは此方の様子見をしようというのだろう。

（全く……この儂とあろう者が、随分とまあ舐められたものよ。様子見などと……余裕のつもりか）

確かに状況は圧倒的に老人に不利だ。魔術を展開しようにも、展開速度の遅さと構成の甘さで魔力を奪われ、元の世界より持ち込んだ兵器を使おうにも、満足に身動きできず弾き飛ばされる。だが、だからと言って打つ手が皆無ではない。

万を越える刻を生きて来た。其の四分の一近くは血と鉄に彩られている。経験した戦いは数知れず、地獄を越える煉獄を味わった事もある。幾度も死の淵に瀕した。絶望など可愛い位の失望を味わった。だが、其の全てを乗り越えてきた。

ならば、この程度の苦境、打ち破れぬはずが無し。

（まずは、本来の姿に戻るが先決。されど、今この状況の儂一人では些か難が在ろうな。さて……儂一人で出来ねば、他者の力を使えば良い）

他者。この場に於いては、眼前の異形。クラスAの魔力を持ち、老人の膨大な魔力すら吸収せしめるこの異形を利用しようと言うのだ。

老人が魔力を開放する。だが、術式は組まず魔力を放出しつつける。当然の如く、異形が其れを奪い取り吸収する。

「……！ 阿呆め、かかりおったわ！」

開放する魔力量を更に上げていく老人。異形は其れを吸収しつづけるが、増えていく老人の魔力に対応しきれていない。

ビキツ、と音がする。高速で増え行く高密度の魔力に、空間が軋み罅が入ったのだ。見れば老人や異形の身体も、徐々にではあるが崩れていつている。

「呵呵呵呵……どうした異形。此れより逃れる術、貴様ならば持つておる筈だ。此の俤では……死ぬぞ？」

其の言葉に反応したか、異形の胴体に変質していく。胸部には棘のような器官が出来、背部より現れた複数の腕が老人を拘束する。此れで老人は完全に身動きが取れなくなった。

――――！

声無き咆哮。音は聞こえずとも、不可視なる衝撃として放たれた其れは、刹那老人の魔力開放を止める。

其れは本来ならば隙にすらならない極々僅かな時間。そう、本来ならば。

「グボツ！ ガ……ハツ……！」

異形の胸部の三本の棘が槍と成り、老人の左胸を貫いている。魔力の籠った其れは、確実に致命傷と成り得る一撃。だが、異形の攻撃は其れでは終わらない。

「グッ……！ ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

老人が叫ぶ。先程までとは比べ物になら無い程の速度で、老人の魔力が略奪されていく。

[illegible]

数分か数十分か、或いは数秒だったか、老人――老人であつた青年の魔力の殆どを奪い尽くした異形は、青年の心の臓より『槍』を引き抜き、青年を投げ捨てる。

地面に打ち付けられた際の衝撃で呻く青年。其の胸部と腹部の傷は、既に再生を始めている。だが、予想外の苦痛だったのか、意識が朦朧としているようだ。

数秒の後、膨大な魔力が晴れた後に異形の姿は無く、其処には一人の老人が立っていた。

だけでなくその容姿すら奪い取った。

老人の魔力は桁が違っていた。其れこそ、そこいらの超一流の魔術師と比べても軽く次元の一つ二つ違う程の異常な量の魔力を保有していた。

そんな馬鹿げた魔力、どれ程の強者であろうとそう易々と扱えるものではない。下手をすれば、其の魔力に耐えきれず存在その物が砕け散るだろう。

だからこの異形は、魔力だけでなく其の器の欠片、即ち老人の存在情報の一部までもを共に奪い取ったのだ。

其れは、過ぎたる力の制御装置。其の魔力に適した者の存在情報の一部を得ること、己が身を最適化する。異形としての多様性は失うが、かの膨大な魔力を自在に自由に扱うことが出来るようになる。

そして、老人の魔力と存在情報の二つを手にした今、其の搾り滓たる青年など異形にとって何の意味もない。敢えて言うならば、その辺に転がっている目障りな粗大ごみと言ったところか。

「――」

異形が呟く。只それだけで青年の上空に大魔術が展開された。

先程老人が展開した魔術など、到底比べ物にならないほどの魔力と精密に編みこまれた術式。此れを食らえば、人など数百回殺して余りある。其れほどの異常な威力。無論、この距離で使えば異形も無事ではいられまい。

だが――

「――」

――異形は、僅かの躊躇いもせず起動語を唱えた。
閃光。

爆発。

衝撃。

暴風。

純粹なる破壊となった魔力が、廃村を更地へと変える。

十数秒間廃村を蹂躪した魔力は、最後には呆気無く消えていく。

後には、村の在った場所に出来た巨大な更地と、其の中心部のクレイター。誰が見ても、元が村だったとは分らないだろう。其れほどの変わり様。

其のクレイターの上空には、異形。爆心地に居ながら、掠り傷一つ負ってはいない。

異形は、何かを探すようにクレイタ内を見渡す。其処には、只壤のみが在った。

壤以外何も無い事を確認すると、自らが引き起こした大破壊に何の感情も浮かべず、異形は其の姿を消した。

後には、大魔術の破壊跡が残るのみ――。

E p i s o d e 0 1 T h e e n d

「ごぼ、とクレーターの中心部から腕が生える。ごぼ、ごぼ、と腕に続いて徐々に地面から這い出てくる人影。」

「若いというよりも、幼いといったほうが似合いそうな外見のその人影は、完全に地面から這い出ると髪や服についた土を払い落とした。」

「――随分とまあ派手にやってくれたものだ。下等ふぜいが全霊の長たるわしに刃向かった事、後悔させてくれよう――」

Episode 01（後書き）

因みに、主人公の魔術の才能ですが、魔術は使えても非常に魔力の変換効率が悪いです。どれ位かと言うと、ファア使うのにメカ並みのMP消費する位。

それでも魔術使おうとする辺り、主人公馬鹿なんでしょうか。いや、書いてるの私ですが。

あ、後主人公の使う兵器や機械ですが、適当にそれっぽい単語並べたりそれっぽい説明つけたりしてるだけなので矛盾も多いと思いますけど、突っ込みは受け付けません。ええ、一切受け付けません。反論出切ないし。

しかも、設定上はクラウ・ソラスの最大稼動で統合政府軍の宇宙戦艦破壊できます。最新鋭艦のなまら凄いバリアもまるでシャボン玉の膜のように簡単に破壊します。矛盾があつたっていいじゃない、フィクションだもの。

いや本当は駄目ですけど。

さて、気を取り直して次回更新の予定を――と言いたい所ですが、どうせ一ヶ月以上後になる上に予告しても絶対それより後になるので更新予定は未定で。契約者の次話も書かないといけなないし。

それでは皆様、また次話でお会いしましょう。

Episode 02 AW（前書き）

AWは異世界。APは元の世界。

Episode 02 AW

ファルセナール大陸／ヴァレンディナ王国／アルガ村痕

「さて、これから如何様に動いたものか」

予定では、この世界の何れかの大国にでも入り込み、その組織力を持ってあの異形を探し出し、然るべき報復を与えるつもりであったが、此処で非常に予想外の事態が起こってしまった。

最後に異形の放った大魔術。その破壊から身を守らんと、僅か残った魔力をも無理に放出した。恐らくはそれが原因だろう。

不老不死を得る際に取り込んだ『生命のエリクシール』。

老人の姿を奪われ、本来の姿へと強制的に戻された直後に無理矢理行った魔力の放出。其れが身体や魂と同化した『エリクシール』に干渉し、身体構成を狂わせたのだ。

異形には此方が死んだと錯覚させるためとは言え、迂闊すぎたやもしれない。

戦艦用のエナジーフィールドを使っていれば、このような事態に陥ってはいなかったであろうが、如何に周囲の大気に満ちた魔力で魔力放出を誤魔化せたとしても、此れでは余り意味がない。

エナジーフィールドならば、容易く異形の大魔術を防げるであろうが、此方の生存を知られ警戒されるは必定。此方も直ぐに反撃できぬ以上、攻撃の聞かぬと見た異形が逃走するのを防ぐ事はできない。

異形とて、未だ奪い取った魔力に慣れてはいないのだから、無理に止めを誘うとはしないだろう。何れ魔力のすべてを使いこなせるようになってからでも、遅くはないのだから。

（　　過ぎた事を悔やんでも仕方あるまいが、この外見では融通も効かぬな）

現在の姿は十二歳前後の少年。この姿で大国に地位を持つのは、かなりの至難を極めるだろう。

然し、ある程度の組織力無くば、あの異形の追跡もままならない。せめて今の数十倍の魔力が有れば、『エリクシール』の狂いも正せたのだが。

（高々一般的な魔術師の数倍程度では、『エリクシール』への干渉には足りぬな。加えて奴の魔術を防ぐのに使った魔力、快復には時間が掛かるか……）

こと魔術に関しては、呆れるほど才の無い己が恨めしくなる。無才と遅速な魔力快復速度を補うための魔力量だったが、使い果たしてしまえば意味は無い。

此れから魔力の快復を待つにせよ、其れまでは大きく動く事は出来ないだろう。だが、何もせずに只快復を待つなど有り得ぬことだ。

（差し当たって必要なのは、金と身分か。此れからどう動くにせよ、一文無しに加え庶民の身分ではな。金は手持ちの宝石か貴金属を売ればよいが、身分は　、最低でも勲爵士は有った方が融通も利くか。騎士階級であれば、国の内部にも入り込みやすかるう）

ならば行動するでしょう。此の俛此処に残れど、町の様子を気取った輩に見付かるは必定。生存者として保護してもらうも一策ではあるが、無い腹を探られるのも不愉快だ。

（さて、最も近き街は何処に在るか　　）

ファルセナル大陸／ヴァレンディナ王国／交易都市アルイード／装飾店

交易都市アルイード。

通商の要所に造られた此の都市は、ファルセナル大陸屈指の交易都市として、大陸中のあらゆる商品が集まっている。其れこそ、この都市で買えぬ物等無いとまで言われるほどだ。

其の交易都市の大通りに在る装飾品店で、一人の少女が店主と言いついていた。

「何故だ！ これは亡き父上が集めていた宝石の一つだぞ！ その様な安値など、納得いくものか！」

「そう言われましたもですね。お持ちいただいたこの宝石、見た目は宜しいですが、宝石としての価値となりますと。いえ、私どもと致しましても、それなりの値段で買い取らせて頂きたいと思っておりますが、流石に……」

仕立ての良いドレスを着た、貴族と思しき其の少女に、申し訳なさそうに語尾を濁す店主。

一見すれば下手に出ていても、買取値段は一切譲らないと言うその雰囲気、店主に食って掛かっていた少女は、悔しそうに拳を握る。

其の姿を見て、もう一人のメイド服を着た少女が心配そうに其の少女に話し掛けた。

「お嬢様……、ここでもうアルイードにある装飾品店最後です。これ以上は」

「分かっている、分かっているが……！」

幼くして母を失った少女にとって、今は亡き父は唯一の肉親であり、騎士として目指すべき目標でもあった。其の父の遺品に価値が無いといわれたのだ。少女にとって、到底受け入れられるものではない。

力なくうな垂れた少女が、提示された値段での取引を終えようとした其の瞬間、店に来客を知らせるベルが鳴り響いた。

「邪魔するぞ、店主はおるか」

入ってきたのは、1人の少年であった。

年の頃は十と二つ程。黄金の髪に紺碧の眼を持った、非常に端正な顔立ちの其の少年は、カウンターの向こうの店主を見つけるや否や、少女二人など目に入らぬかのように無視して店主に話し掛けた。

「店主。物を売りたいのじゃが、良いか」

「は、はあ……。お売りになれる品物はどちらで？」

「此れじゃ」

宛ら、老人のような口調の少年に、困惑の色を隠せぬ店主であったが、少年がカウンターに乗せた宝石を見て、其の表情を一変させた。

途端に難しげな顔で品を鑑定する店主。

恐らく、所詮子供の持ち込んだ品と軽視していたであろう店主は、次々とその宝石を手取るたびに、驚愕の色に顔を染めていく。

一頻り品物を手にとった後、店主は真剣な表情で少年に話し掛けた。

「お客様。お売りになれる宝石は、これらで全てに御座いますか？」

「全てじゃ。　ああ、無用な事と思うが、よもやわしを謀ろうな
ど考えてはおるまいな？」

「『っ！？』」

装飾店の店主と少女二人が息を飲む音が響き渡る。店主の鼻先には巨大な武器が突き付けられていた。

ハルバートの刃を巨大化させ、柄を極端に短くしたような異形の大斧は、少年の華奢な片腕により店主に其の切っ先を向けていた。異様と言えば余りにも異様な光景。何せ、見た目十二の小柄な少年が、己が身の丈程もある鉄塊を片手で持つているのだ。其れも、明らかに重さを感じていないかのように、軽々と持ち上げている。其れを向けられている店主は、到底平常ではいられまい。

「店主。何をしておる？　早う見積もらぬか」

「は、はい！」

僅かに不機嫌そうな色を滲ませた其の声に、呆然としていた店主は、慌てて料金の計算を始める。

その間も、一切切っ先を揺らす事なく、少年は大斧を店主に向けつづけている。

「お、終わりました……。これら全て併せまして、七百三十万ダルドで如何でしょうか？」

料金の計算を終えた店主が、恐る恐るといった体で、少年に伺いを立てる。

側でそのやり取りを見ていた二人の少女は、店主の提示した金額に息を呑んだ。

何せ、少年が出した宝石からすれば、素人目に見ても其の金額にはかなりの色がついているのが分かる。命には変えられないという事だろうが、それにしても随分と思いい切ったものだ。

少年は二人其の反応を横目で見た後、考えるように僅か視線を落とし、暫くの後店主の言葉に頷いた。

「……代金はこちらに。お確かめください」

「ふん。邪魔したな店主」

差し出された革袋の中身を確認する事なく、少年は引手繰るように店主の手から革袋を受け取り、店主に人声掛けると店を出て行った。其の手に持っていた大斧は、何時の間にか消えている。

ドンツと音がした方を少女二人が振り向くと、腰でも抜けたのか、店主がカウンターの向こうで尻餅をついていた。其の顔には、安堵の色が広がっている。

対応を誤れば、殺されていたかもしれないのだ。当然の反応だろう。

「……行くぞ」

「あ、待ってくださいお嬢様！」

ドレスを着た少女がメイド服の少女を促し、装飾店を後にする。残った店主は、抜けた腰も治らぬまま、暫く呆然と天井を見上げていた。

ファルセナル大陸／ヴァレンディナ王国／交易都市アルイドノ大通り

アルイドの商店建ち並ぶ大通りを、彼は歩いていた。

当初の予定通り金銭の入手は成った訳だが、問題となるのは此れからだ。

（身分か。何ぞ足掛かりと為るモノでも在れば良いが、そうそう何
度も上手くも行かぬな。……まあ良い、はした金だが金銭も手に入
ったのだ。そう急く事も無い）

とは言え、矢張り切欠は欲しいものだ。国に強いコネクションを
持つ誰ぞと知り合えれば、言う事は無いのであるが。

最も効率よく事が成せるのは、果たして如何様に動いた時か。大
した事の無いような選択肢であろうとも、結果が大きく異なる事も
ある。あの異形がどう動くか分からぬ以上、慎重に然し速やかに行
動せねばなるまい。

（一まずは宿を取らねばな。今後の方針は其れから考えるとするか
の）

思考を中断し、宿を探そうと顔を上げた其のとき、背後より彼を
呼び止める声が響いた。

「君っ！ 待ってくれ！」

「お、お嬢様　っ」

振り向けば、其処には先の装飾店に居た少女二人が此方に向かい
走ってくる。

「主等はあの店に居た　、わしに何ぞ用でも有るのか？」

「君に……頼みたいことがある」

頼み事とは、恐らくあの店で店主と言いつけていた事と関わりが
有るのであるが、態々その様な些事に此方が付き合う必要などな
い。だが、其処で彼はふと目の前の少女の服装を見る。

（貴族……か？　ならば、使えるやも知れぬな。頼みとやらを聞き入れるかは別としても、内容を聞くだけならば問題もない）

何れにせよ、次の行動を決めかねていた身としては、此れは好機であろう。ならば、其の好機を最大限にまで生かすまでのことだ。

「……道端で話すこともなからう。何所ぞ宿でも取りたいのだが」
「其れならば私が案内しよう。安くて良い宿を知っている」
「任せよう」

前に行く少女達の後を歩きながら、彼は中断していた思考を再開し、今後の計画を練り直す。其の口元に冷笑を浮かべながら。

ファルセナル大陸／？？？／？？？／神殿

薄暗い蠟燭の明かりに照らされて、数人のローブを纏った人影が魔法陣を取り囲んでいた。その魔法陣の中には、白衣を着た一人の男性の姿があった。

其の男性は、自身を見て感嘆の声を漏らす周囲の人影を、冷やかに眺めている。

「……で、此処は何所でお前らは誰だ？」

何処か蔑む様な口調で、男性が口を開く。周囲の人影が男性の其の口調に気づいた様子はなく、男性の其の質問に自分達の中の一人を振り向いた。

其の人影が男性のほうへと歩みを進める。

「お前が説明してくれるのか？」

「はい。まず、貴方に知っておいて頂きたい事が一つ有ります」

聞こえて来たのは女性の声。男性の様子を伺う様に言葉を切った其の声に、男性は無言で続きを促した。

「この大陸の名はファルセナール。そしてこの世界は、貴方の居た世界ではありません」

E p i s o d e 0 2 T h e e n d

Episode 02 AW（後書き）

契約者が微妙にスランプ気味なので息抜きに更新しました。次は未定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3368n/>

transcendence person of endless fate ~ 果て無き宿命の超越者 ~

2011年1月20日23時32分発行